

平成30年度 「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」に関わる
「プロジェクト型」の共同研究 研究報告書

平成31年4月30日現在

研究課題名	外交官から見た近代日露関係史				
申請者 (代表者)	氏名		所属機関・職		
	醍醐龍馬		小樽商科大学准教授		
研究構成員		氏名	所属機関・職	専門分野	役割分担
	1	醍醐龍馬	小樽商科大学准教授	日本政治外交史	榎本武揚
	2	矢嶋光	名城大学准教授	日本政治外交史	芦田均
	3	藤本健太郎	日本学術振興会特別研究員	ロシア政治外交史	チチャーリン
	4				
	5				
	6				

研究成果の概要

本研究は、近代日露関係を外交官の視点から考察する企画である。具体的には、明治初期から戦後までの日露関係を、それぞれの時代を代表する外交官（榎本武揚、芦田均、チチャーリン）の視点から俯瞰する。従来の国際関係史は、構造的要因で語られることが多かった。もちろん、国際政治及び国内政治の構造的変化がキーポイントになっていることは確かだが、そのような変化の情報を本国政府にもたらずことで政策決定に影響を与え、実際の条約締結などでも大きな役割を果たすのが外交官である。こうした問題関心から、本研究では外交官の視点から日露関係の3つの転換期（樺太千島交換条約、日ソ基本条約、第二次世界大戦）を考察した。

榎本武揚の視点からは、日露関係を安定化させた樺太千島交換条約の背景に、次に控える朝鮮政策を見据えた明治政府の外交戦略の存在を指摘した。同時に、その後の榎本が日露協調を前提に南洋進出の志向性を高めることに着目し、「北守南進」論の萌芽を見出した。チチャーリンの視点からは、スターリンの積極的な対日政策の原点が1920年代に遡ることを明らかにした。この成果は、20年代から30年代にかけてのソ連外交を連続的に捉えるとともに、日ソ基本条約後の日露友好という歴史的評価に再考を促した。芦田均の視点からは、第二次世界大戦前後の芦田における対ソ協調論から反ソ論への転換が、国際連盟やそれを基軸とした集団安全保障体制に期待を寄せてきた彼の国際秩序観に由来するものだったことを明らかにした。また芦田がソ連との提携に見切りをつけた具体的な背景には、独ソ不可侵条約や朝鮮戦争を指摘した。

主な発表論文等（雑誌論文、学会発表、図書 等）※謝辞の有無について明記願います。
醍醐龍馬「明治初期外交官による東アジア政策構想－駐露公使榎本武揚の『北守南進』論－」
瀧口剛編『近現代東アジアの地域秩序と日本』（大阪大学出版会、2019年刊行予定）、謝辞有り

矢嶋光「戦間期『新外交』論者の冷戦認識－芦田均の積極的再軍備論－」瀧口剛編『近現代東
アジアの地域秩序と日本』（大阪大学出版会、2019年刊行予定）、謝辞有り

藤本健太朗「チチャーリンからスターリンへ－1929年4月4日政治局決定をめぐって」『1920
年代ソ連の対日政策－北サハリンを中心に－』（京都大学博士学位論文、2018年）、謝辞無し

当該研究活動を基に応募中の研究プロジェクト（科研費等）

※枠を調整することは構いませんが、ページは追加しないでください。